

世代交代について

本日は次年度委員会となっていますので、世代交代についてイタリア映画を例に話をしたいと思います。

イタリア映画は、多くの優れた映画監督を輩出して来ましたが、私はいままで欧州映画の中でも心に響く多くのイタリア映画を観て来ましたが、中でもルキノ・ヴィスコンティ監督の「山猫」は秀逸でした。「山猫」はランペドゥーサの小説の映画化で、カンヌ映画祭のパルム・ドールを受賞しました。「山猫」とは主人公のシチリアの公爵家の紋章です。

「山猫」の粗筋を紹介すれば、1860年、イタリア統一戦争中、老公爵は、新たな時代を象徴する統一派のガリバルディ軍に入隊した甥に望みを託していました。甥が新興成金の市長の美しい娘に恋をしていることを知り、思案の末、結婚を承諾します。翌年、イタリア統一後、新国王の親政が始まると、公爵は、甥と娘の結婚を祝う為、広大な公爵の屋敷で大舞踏会を開催します。娘は公爵に踊りの相手を申し出て、公爵は受け入れ、見事な踊りを披露します。この刹那、公爵の心に、滅びゆく貴族社会から市民社会の移行の容認、老公爵から若い甥の世代交代、そして、不安や孤独を超えて新たな時代への期待など様々な感情が去来します。やがて、舞踏会が終わり、人々は解散し、公爵は静寂の夜の街を彷徨いながら星に「いつになれば永遠の世界で会えるのか」と呟いて映画は終わります。この映画を監督したヴィスコンティは実際、ミラノ公爵という大貴族の出身で自らの心情と重なるものがあつたとされています。

世代交代はこの映画に限らず、人生のあらゆる場面で遭遇します。家族に於いても職場やあらゆる社会活動に於いても「縦軸の繋がり」が連綿と続くことを期待して行われます。

私も譲る側の心情が理解できる年齢となって来ましたが、その刹那は誰しも不安や孤独や執着等複雑な感情が入り交じり、その瞬間を迎えるのではないのでしょうか。そして、自分の世界が失われる不安と孤独を感じながらも、新しい世代に期待を抱くのではないのでしょうか？

21世紀になってから、イタリアを始め欧州映画は衰退著しく、映画界はグローバルサウスの台頭を迎えて世代交代を果たしました。

ロータリーは、幸いなことにすべての役職に1年という任期があり、次年度への交代は米国大統領の交代劇の様にダイナミックに行われます。

当クラブの次年度は旧弊に捉われず新たな事業展開となりそうですが、当初の方針通りクラブの活性化となることを期待します。

最後になりましたが、本日がその準備の為に有意義な時間となりますことを祈念申し上げまして会長の時間を終わります。